西園寺陶庵侯題字
茗香園主人米翁著

盆栽培養法

天留白時行

癸卯立夏後四日

陶菴題

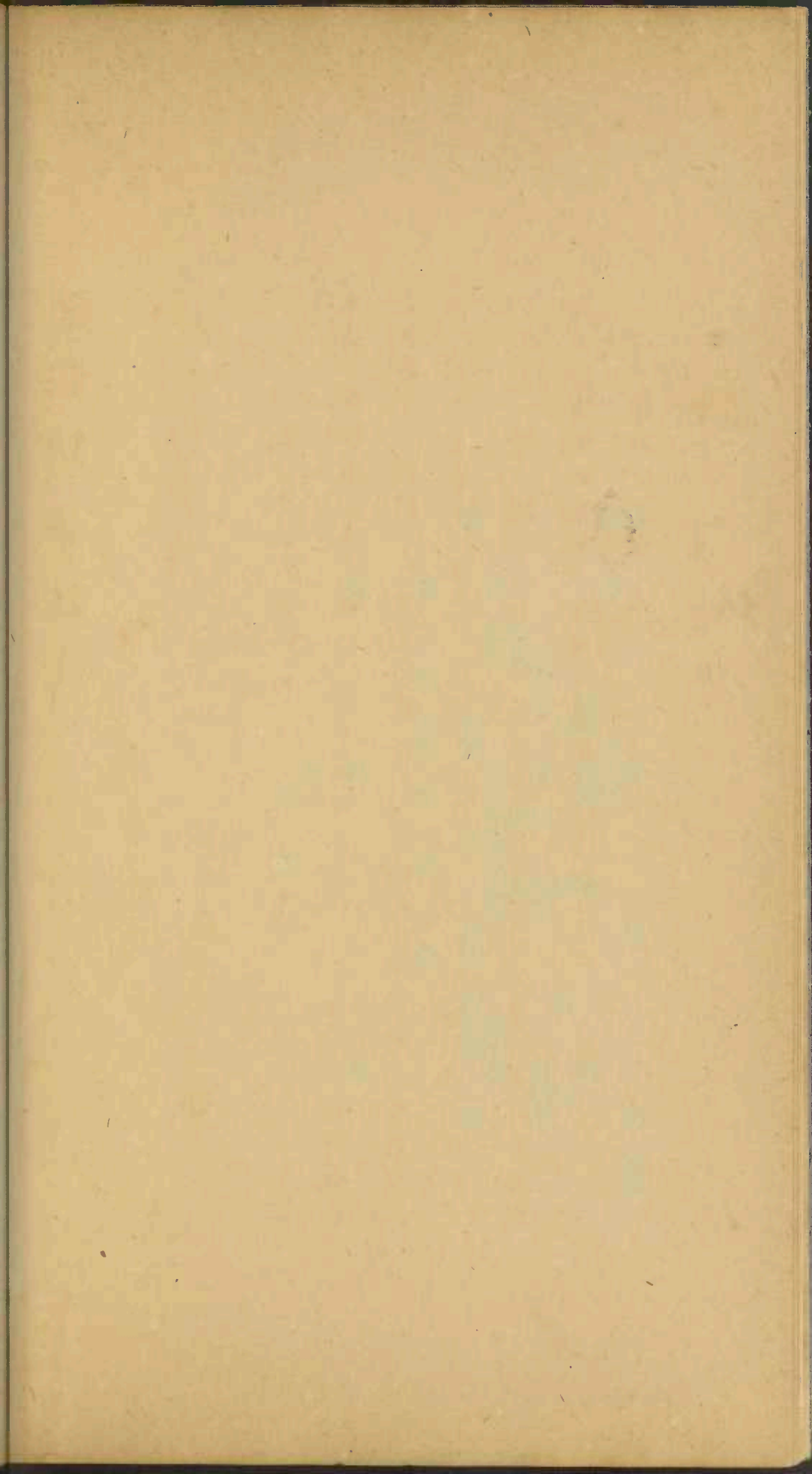
自序

近時に於ける盆栽の流行は未曾有の盛況と稱せらる。而かも未だ之に關する著書あるを見ず。供樂會主加藤三銀之を憾みとし。來つて予に一書を著さんことを乞ふ。予業務多忙の故を以て固辭すれども聽かず。終に實驗の一部分を述說して其需めに應ず。是れ本書の成る所以なり。
然れども盆栽培養の事たる頗る多岐に

亘り。之を詳說するは一朝夕の業に非ら
されば。更に他日を期して完全なるもの
を公にせんとす。讀者請ふ諒せよ

癸卯五月

著　者　識

目録

盆栽培養法

苔香園米翁著
無待庵主人補正

○盆栽の類別

本書の所謂盆栽なるものは蘭、菊、萬年青、朝貌の如き、唯だ花香葉色を賞觀する鉢物とは異なり、草木竹石の類を以て天然の景致を尺寸の盆裡に趣向し、高尙の意匠に成れる一種の美術、幽雅の風趣を呈する一幅の活畫として愛玩するを指すのである、

其處で今日世間の數寄者が慣用する所の方法を大別すれば

第一　直幹
第二　双樹

第三　寄植
第四　懸崖
第五　半懸崖
第六　石附

にて、此外草物、水石亦盆栽の配飾物として用ひられつゝある

直幹　とは讀んで字の如く、大体に於て樹身の直立せるを指すので、太さ拇指大、高さ數寸のものにても、盆に移して程好き位置に栽ゆれば、山野の景致自然に描出され亭々天を摩するの概あるものである然れども直幹孤獨の樹にして觀者の意を滿たすに足るものは甚だ得難い、のみならず獨り直幹ものを以て總ての景致を摸するは到底出來得可らざる事であるから、更に幾多の方法を案出するの必要が生じて來る、其處で直幹に次で工夫されたるは

双樹 である、双樹とは俗に相生とも云ひ、二樹の恰も一根より生じたる如き觀を爲せるを指すのである、這は深山大林には實在すれども、盆栽としての双樹は初めよりあるのでは無い、大抵は二樹を密着せしめて植込み、其年所を經て互に緊着するのを待ち、之を双生と稱するのである、而して其斯くする所以は、山林に實在せる實物を摸するの目的に出でたるは勿論なれども、一樹の足らざる所は他樹の餘れるを以て之を補ひ、疎密、繁簡、大小、高低、互に讓り互に加へて樹容に一段の妙趣を添ふるの便利あればである、此外株根より稍や離れて二枝に岐分したるものを、直幹にして双樹の態を備へたりと云ひ、一根より數幹叢生したるを株立と唱へ、一株にして高く數根を露出せるを根上と稱し、何れも數寄者の愛賞する所である、次に

寄植も亦双樹と同じく孤獨見るに堪へざる直幹ものを集めて造くるが故に最も技倆を要すと云ふものあり實際斯の如き場合なきに非らざれども、一盆の裡に數株を雜植して森林の景致を摸するが、其目的であるから縱し完全なるもの丶みを用ゆる場合に於ても多くの工夫を要するは勿論にして、寄植は一般に至難の術としてある、而して二本寄の外は三、五、七の奇數を用ゆべしと云ふものあれども、格別理由ありての事に非らざれば、敢て之に依據するに及はぬ、或は四、六、八、十の如き偶數を用ゆるも妨は無い、唯だ其風韻にして賞するに足れは可いのである、双樹、寄植、名稱は異なれども、其形狀の上より云へは、直幹の部類と同視して差支は無いが獨り是等と大に相反して居るのは

懸崖である、懸崖は千仞の斷崖、萬丈の絕壁に垂懸倒生せる樣を

摸するのであるから、樹幹素より直なる能はず總て、細葉小花蔓の物などは最好の材料なれども、其他のものを用ゆれは、往々葉花の過大なる嫌ありて、甚だ活畵たるの主旨に背くやうであるが、斯る場合には樹の全形を觀るのでは無く唯だ其一部分の風致を賞することゝ挿花に同じと思へは可いのである

半懸崖　は直幹と懸崖と相半するものゝ謂で、横生の樣を摸したるものである

石附　は巖石の上に生じたる樣に擬するので、平素は其營養を便ならしめんが爲に盆裡に於て眺むれども、多くは水盤に移して臨崖傍水の趣を寫すが故に、或は之を稱して石附根洗ひと云ひ、其盤根堅く石を抱擁せるを賞するのである

方法は以上の如しと雖も盆栽の眞趣味は自然の美を顯はす活畵

たる處に存するのであるから、強ち之を株守するには及ばぬ、實景實物を見、又は名人大家の繪畫に依て工夫を凝すが肝要である

○培養土と其用法

土の盆栽に於けるは、猶水の魚に於けるが如く、須臾も離る可らざるものである、然れども水に清濁鹹淡の區別あり、魚族其性に依て棲處を異にすると同じく、土も亦樹質に應じて大に適否あり、故に世間或は種々の土質を擧示して、其効驗を說くものあれども實際は黑土に赤土を混合したるものを用ゆれば足るものである

黑土とは畑の作土を云ひ、赤土とは帝都山の手邊に在る多少粘着力を有するものを云ふ、此黑土六分に赤土四分を混じたるものを用ゆれば大抵の樹木を植ゆることを得、唯だ松、落葉松の如き餘り肥料を好まざるものには黑土、赤土及び河砂の三種を等分に調合

したるものを用ゆるが可い、又或人は道路に於ける雨後の細砂を之れに代用する、卽ち東京の市街には多く多摩川砂利を撒布しあり、其砂利には牛馬の糞尿浸入し居りて、多小の肥料分を含蓄するが故に雨後のものを採り來れば、毫も塵埃を交へざるのみならず、其肥料分は輕且つ柔にして、松、落葉松には最も適當し、而かも水拔けは甚だ宜しとの事である、併し是れは唯だ東京に於てのみ行ひ得る一種の便法であるが、夫れと同じく風土氣候の如何を鑑みて用土を撰擇すれば、或は意外の便法あるやも知る可らず、地方に在ては其便法を案出するのが寧ろ肝要である、或は又

芥土　とて、塵芥の腐朽し土に化したるものを良しとすれども、芥土には猫蛙と稱する小虫發生し、往々樹根を食盡して枯死せしむることあれは、之を用ゆるは甚だ危險である、併し良好の黑土を得

る、能はさるか若くは其他の事情の爲に強て芥土を用ひんとならば甚だ面倒なれども是非左に記るす丈の手續を踏ねばならぬ卽ち

芥土を作くるには、先づ初年に一個の穴を掘て、其中には重に木葉を埋め込み、次年より年毎に一個の穴を設けて順次に五個を造るのである斯くして最後の五年目に至れは、初年に埋め込みたる木葉は已に略ほ土に化し居れは、夫を掘出して黑土と等分に混合し、凡そ三寸位の厚さに擴敷して、其上に稀薄なる肥料を注ぎ、寒中の日光に曝らし、且つ充分に氷結せしむるのである、斯くそれは、猫蛙の卵子を全然殺滅し得るのみならず、毎年順を追ふて用ふるとが出來る併し是れは土を云ふよりも寧ろ肥料と稱する方が適當なる程に、多量の肥料分を

含有するを以て、盆栽に用る時は一切施肥するに及はぬ、而して黒土と同じ様に赤土を交ゆるか、或は其上に一割位の河砂を加へざれは、漏水を妨げるの恐れがある

培養土の種類と其調合法は大畧以上の如くなれども、唯だ土を盆中に盛りさへすれば足りると思ふは大なる誤りである

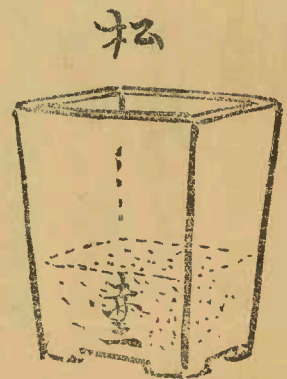
土を盆中に盛るに就ては、第一細大洩らさす根を包容して、其生長を便ならしむる爲め、第二雨水に遭遇し又は日光に曝すも固結或は龜裂の憂なからしむる爲め、第三漏水を容易にし、肥料を緩和普及せしむる爲め、凡そ一分五厘目の篩に掛けて、一旦乾燥せしめたるを用ゆるを良とす、勿論土を堅く盆中に詰め込むときは漏水を妨げ根腐れを生ずるの恐れあれは、成るべく柔く盛るのが肝要である、尚水抜けを良くせんとせば一割位の砂を交へて用ゆるが可

い、そして其砂の河砂に限るは云ふ迄もないが、河砂にても若し市中の砂屋から求めたものならば、是非充分の塩出しを爲したる後に用ゆる樣にせねばならぬ、之に就て或巧者の失策談がある、其人或時砂屋から取寄せたる砂に雜じれる貝殼を取除かんとして、偶然之を撿め見たるに、それは河の產に非らずして海のものなることを知りたれは大に驚きて早速塩出しを爲し用ひしかは、幸にして其年は何の故障も無つたが、翌年同じ砂を用ひて全く失敗したれは其次第を吟味したるに、前年には所要の分量丈塩出したるを忘れ、使ひ殘りを其儘に用ひたる爲め、終に不慮の失策を招きしこと分明せりと云ふ、宜しく鑑むべきことである

若し又懸崖物用の深盆に、梅、松の類を植ゆるときには左圖の如く

梅は底部三分の一丈け消炭を以て充たし、松は同じく赤土の粗大なるものを充たして漏水を便にせねはならぬ

○肥料と其用法

土を以て魚の水に比するを得べくんは、盆栽に於ける肥料は魚の餌食に譬ふるを得べく、其撰擇に就て大に注意を要するは勿論にして、土と同じく種々の物を擧けて効否を說くものあれども、普通盆栽に用ひて最も著効あるものは先づ

▲油粕　である、夫を用ゆるに就て最も簡易なる方法は、粉末を盆裡に散布し灌水に依て漸次に分解せしむるのであるが、其全く分解する迄は上部に地皮を生じ、乾けば卷くれて甚だ觀を害ふものなれば、斯る無性法は決して行はぬが可い、其次は夏期炎熱の劇しき時に油粕一升を水一斗に混和したるものを、一週間位放置して直に用ゆるのであるが、是れにても實際は肥料たるの効驗を奏せしむることが出來る、けれども凡そ猫蛙や、油虫の生ずるのは、其原因獨り用土と外間の關係に止らずして、肥料も亦之を促生せしむることあり、特に油粕の如きは最も其恐れのあるものであるから、大抵は矢張り油粕一升に水一斗の割合を以て調合し、瓶類に貯へて、雨水注入の恐れなき處に置き、凡そ一年を經たるものを、更に水と等分に混和して用ゆるを例とす、先づ是れならば虫害の憂無る

べく、且つ一年より二年、二年より三年と、古るくなれは夫れ丈け肥料分は多少消散すれども、其代り當りは、益和らかく成るものなれは其一年と云ふは最短期と心得て可いのである

併しながら、以上の方法は豫じめ用意して一年を經たるの後に非らざれは用ゆることが出來ぬ、其處で時候の如何に拘らず、臨時に製造して臨時に用ひ得べき方法を說くの必要がある、夫れは矢張り油粕一升を水一斗に混和したるものを鍋、釜の類に入れて、凡そ二時間位火に懸け、之を五升に煮詰めるのである、斯くすれは決して虫害の憂なく、最も安全にして、其當りも甚だ和かなれは直に用ゆることが出來る、そして之を用ゆるには一合に一升の水を加へる、云ひ換へれは十倍の薄さにするのである、又

▲人糞　を用ゆることもある、其場合には寒中汲出したるものを

土篩に掛けて紙屑類を除き、桶に入れて密閉し、雨水注入の恐れなき場所に貯へ置き、凡そ一年を經て其臭氣の全く去るを待ち、水を加へて十倍の薄さにして用ゆるのであるが、人糞の効驗は其見はるゝことの速かなる代りに、消散することも亦速かなれは他のものに比し繁々與へねはならぬ、併し高尚なる美術品として、明窓の下、淨机の上に置くべき盆栽に人糞を用ゆるは甚だ不似合の事て、自他をして何となく惡感を生せしむるの恐がある、故に敢て之を用ゆることを勸むるのては無いが、肥料と云へは先づ指を人糞に屈するのが世間の習慣であるから、之を逸するも如何と思ひ、序ながら述へた迄である、又此筆法より云へは、油粕も餘り奇麗とは云はれぬ、其處で最も奇麗にして、而かも虫害の憂なく、臨時に製造して臨時に用ひ得らるゝものは何かと云へは

▲大豆の肥料である、其製法は大豆一升を水一斗の中に入れ、凡そ半日間火に懸けて、之を五升に煮詰め、更に十倍の薄さにして用ゆる、之れも其古るきを貴ことと他のものに異ならざれども、仮令へは油粕を月一回與ふるものとせは、大豆肥料は五六回も與へねはならぬ、唯だ夫れ丈けの相違である

肥料の製法と其調合は大畧上記の如くであるが、假令へは鄰躅、米躑躅の類は人糞を嫌ふと云ふ如く、草木の種類に應じて肥料に適不適あるは勿論なれども、油粕及び大豆肥料なれは、先づ大抵の盆栽に用ひて差支へなきを以て、茲に施肥の方法を説くに當り、其分量及び度數を示せるは油粕を標準としたのである

一、春期植替の後は凡そ四週間を經て前記定量に五倍の水を加へたる薄肥を與へ、其後は月に一回施肥すべし

二、施肥は夏の土用に至て休止し、秋期落葉前に一度行ひたるのみにて冬期中は一切施肥せぬが可い、但し松のみは此期中と雖も引續き肥料を與へ、且つ水切れのせさる樣注意すること最も肝要にして、若し之を怠たるときは往々枝枯れを生ずることがある

三、花物は新芽や蕾の出掛つた時より施肥を見合はすべし、但し結實を望む時は充分に肥料を與へねばならぬ

四、四季咲のものは花の散つた後へ直に施肥するが可い、但し物に依りては腐水でも充分であるから、肥料は濃厚なるには及ばぬ

五、餘り乾き過きたるものに施肥するは宜しからず、其時には先づ上水を與へて盆中の土を濕し、其稍や乾くを待ちて、後にす

るが可い

六、又之に反して、梅雨中に限らず、餘り濕ひ過ぎたる時に施肥するも亦甚だ宜しくない、其際は前日より水加減を爲し、若くは室内の風通し好き場所に取込みて、其適度に乾きたる處を見濟まし施肥するが可い

七、其日の中に乾かしむる爲め施肥は朝の間に於てするを可とす

八、總て肥料は濃厚多量に失するよりは、稀薄少量に失する様心掛くるが肝要である

九、肥料は出來得る限り古るきを用ゆるが可い

以上の條項に準據して行れば先つ大過は無からう

○灌水

肥料に次て必要なるは水てある、水には肥料の如く種類は無いが最も佳いのは雨水にても井水にても豫め瓶に貯へ置きて、子子の生ずる位ゐ、日數を經たのてある、若し夫れ程に爲し能はずとも朝汲みたるものを日中に與ふる位にせねはならぬ、汲み立ての水と、鹽氣、銅氣のある水は決して用ひぬが可い

一体盆中の土は常に乾に失せず濕に過ぎざる樣保たしむるのが肝要てあるから、水を行る場合には底へ抜け通る迄行るけれども、一旦乾きたる後に非らざれは再び行るとは出來ぬ、ツマリ濕して乾かし乾かしては濕すと云ふ手數を程能く繰返して行けは可いのてある、ソコて物と時候と、其置場所とに依て一概に云ふとは出來ぬが、先づ夏期ならは日中に一度、三時頃に一度位て可い、其餘の時は拾ひ遣にする、拾ひ遣とは彼此乾濕の度を見計つて灌水する

の謂ひてある、總て落葉後は水引き惡しきゆへ、冬期は凡そ一週間毎に拾ひ遣にすれは足りる、此外平素水引き惡しきもの又は梅雨中雨に遭ひたるものは室内の風通し好き場所に取込みて、乾かしめねはならぬ、夫から日中葉に水を灌ぐは大禁物である、要するに水も肥料と同じく多に失するよりは、少に失するを可とするから假令葉の少々萎縮したる場合にても、日に幾回となく水を與る如きは更に其効なきのみならず、却て根腐を生ずるの恐れあれは、之を日蔭に移し少量の水を與へ漸次に恢復せしむるが可い

○實生物の事

盆栽は自然の縮畵てある、故に之に用ゆべき樹木は、高さ三尺に出てさるもの、或は二尺前後、甚たしきは僅に四五寸にして根幹枝の釣合が恰も數十百年を經たる老大木と同じ様に出來て居なけれ

はならぬ、左様のものは初より何處にも無い縦し偶に有つたにしても夫を直に薄き鉢に移植すれは、境遇の異なる爲めに生存し得らるゝものては無い、であるから最初より盆栽用として特別に仕立てるのであるが、差木、取木、接木などの方法を用ひ老巧なる手術を施して相當の年所を經過せは、一見實生物と見紛ふ程の逸物を得ること敢て難からざれども、已に大樹の割合に出來て居るのてあるから、其枝は如何に細且つ密なるにもせよ、之を幹に比ふれは或は伸ひ過きたるの嫌ひあり、根張りも亦其通りて、到底多少の不釣合は免れぬ、であるのみならず取木、接木は初めより盆裡の生活に慣れたる實生物の如く、永く其壽命を保つ能はざるの恐れあれは最も安全にして且つ成効の確かなる方法は、實生物を仕立つるのてある、夫に就ても實蒔より始むるか、或は苗圃に就て適當の苗

木を求めて、之を仕立て上げるか、若くは山野を跋渉して二三年を經たる實生物を採取するの三方がある、孰れも其目的を達したる曉には同一にして其間に何等の相違なければ、何の方法に依るも差支は無いが、實蒔より始むるは隨分氣永の業であるし、苗圃の苗木には其種類に限ありて、何品にても得らるゝと云ふ譯には行かぬ、故に本書には專ら實生物採取の方法を説く、此方法とても敢て百發百中と云ふ譯には行ぬが、併し最も興味のある仕事て、縱し徒勞に屬したればとて、山野を跋渉して身体の健康を益すには、極めて屈強の方法てあるからてある

○實生物の採取

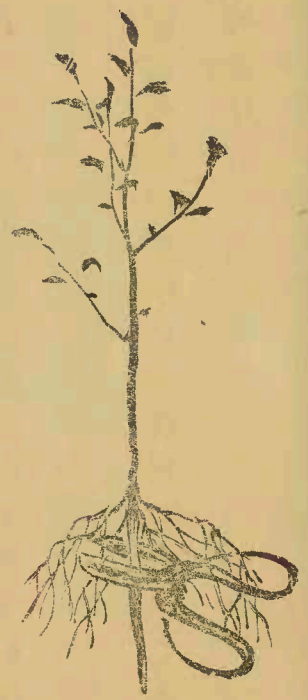
山野を跋渉して實生物を採取するは、嚴冬を除くの外、何時にても差支へは無いが、先づ寒暖計が華氏の五十度前後を示す、春秋の彼

岸頃を以て適當の時期とする、就中春の彼岸頃が最も好時期てある、扨て山野に就て實生物を採取するに當り、先づ何人の目にも附き易きは、岩角などに在りて餘り大きく生長せず、而かも頗る古色を帶びたるものてある、之を其儘盆裡に移せは好箇の盆栽たるべしと思ふは至極尤もなれども夫等は大抵大根のみにして細根に乏しけれは、之を持歸りて生育せしむることは甚だ困難てある、先づ成効の見込みなきものと諦むるが可い、夫より二年若くは三年を經たる若木にして、枝數の多く打ち居るもの、下枝の確かなるもの、根の充分に張りたるもの、根元の太きもの、幹の素直なるものを撰みて採取するのが成效の捷徑てある、そして愈〻採取する場合には左圖の如き

形に、其生土と倶に掘採し、土の崩壞を防ぐ爲め、藁にて堅く束縛し、其上を水苔にて卷き、又更に藁を以て包裹して持ち歸へるのてある、若し直に持ち歸へることの出來ざる塲合には斜に地上に置き、乾燥したる時は灌水するが可い、左すれは決して枯損するの恐れは無い

扨て採取し來つてから後は何うするかと云ふに、或は直に土鉢に

入れて花壇に置く人もあるが、夫よりか、水苔を取り除きて其儘花壇の中へ埋め込むのが可い、花壇は石瓦木竹の類を丁寧に除き去りたる土を一分五厘目の篩に掛けたる程の大さに碎き厚一尺、巾三尺、長二三間の寸法を以て、地と平均、若くは二三寸の高さに設けて置く、そして種類に依て一概に云ふとは出來ぬが、略ぼ一尺位の間隔を置て植ゆるか可い、其間の手當は暑氣強くして乾き過きたる日には夕方に水を與へ、又炎威の劇しき時は葦簀を以て之を掩ひ日光を避けるの外肥料などを與ふるには及はぬ、否な肥料は寧ろ禁物てある

斯ふして翌年の春彼岸迄置き、始めて鉢に移すのてあるか、其時には先づ左圖に示す如く

上根を殘して牛蒡根を切去るが可い、そして其切口に肉を巻かしむる爲に、再ひ元の花壇に移して凡そ二三週間は其儘に置く、夫れから先づ自己の植へんと欲する鉢の大小方圓を取極め用土の項に述べたる通の土を用意し、菜箸の類を以て、柔く且つ充分に土の根へ廻はる樣にして植ゆるのである之を稱して假植と云ふ、若し此際上根の數多くして、根附きの見込み確かなりと思はゝ、牛蒡根を成るべく短く切つて、他日植替の際幾ら薄き盆にても移し得ら

るゝ様になし置くが肝要てある、此假植は翌年の春迄にして、其間は餘り肥料を與へぬが可い、稀薄の肥料を月に一回も與ふれは澤山てある、併し水は乾濕の度を見斗つて與ふることを怠つてはならぬ、夫から棚架の上に置くなどは宜しくない、成るべく花壇若くは地上に直に置くが可い

○植替

假植て一年間鉢に慣らして置き、夫から愈本植替をするのてあるが、其時には根を充分に緩解し、疵の附かざる樣菜箸にて根に着附せる舊土を悉く落し、且つ鋭利なる鐵鋏を以て腐れ懸りたる舊根や、過贅の細根を切去り、總て假植の時と同じ様にして盆に收むる其後三四週間を經て、薄肥を與ふると及び其他の手續は、已に肥料の部、灌水の部に於て述べたる通てあるが、或は其儘二三年も置く

人あれども、植替は何うしても年に一度宛行ふが可い、左も無いと新陳代謝の働を害し、樹木の生存發育を妨げ、或は灌水の中迄充分に通らぬ爲め下枝を枯すことあり、又蟻、蚯蚓の附くことがある、夫れて已に盆栽に出來上つて居るものならば、周圍の土を寛めて靜に拔き取れば左圖中第一(卽ち右方)の如き形になつて居る、是れは根か盆中一杯に擴かりて鉢の形を爲し居るので、此鉢の出來て居るものならば、何時他の盆に移すも大丈夫であるから(但し酷暑嚴寒の候を除く)山堀と云つて山から取立てのものや、地堀と云つて花壇などから拔き立てのものに比し、大に珍重さるゝ所以で、價格の上に於ても殆んど十と一の相違がある、扨て夫より根元の土を幾分か殘して、根を緩解せば第二(卽ち中央)の如き形となる、ソコて過贅の細根を取捨することは已に述へたる通りて可いが根は土より先

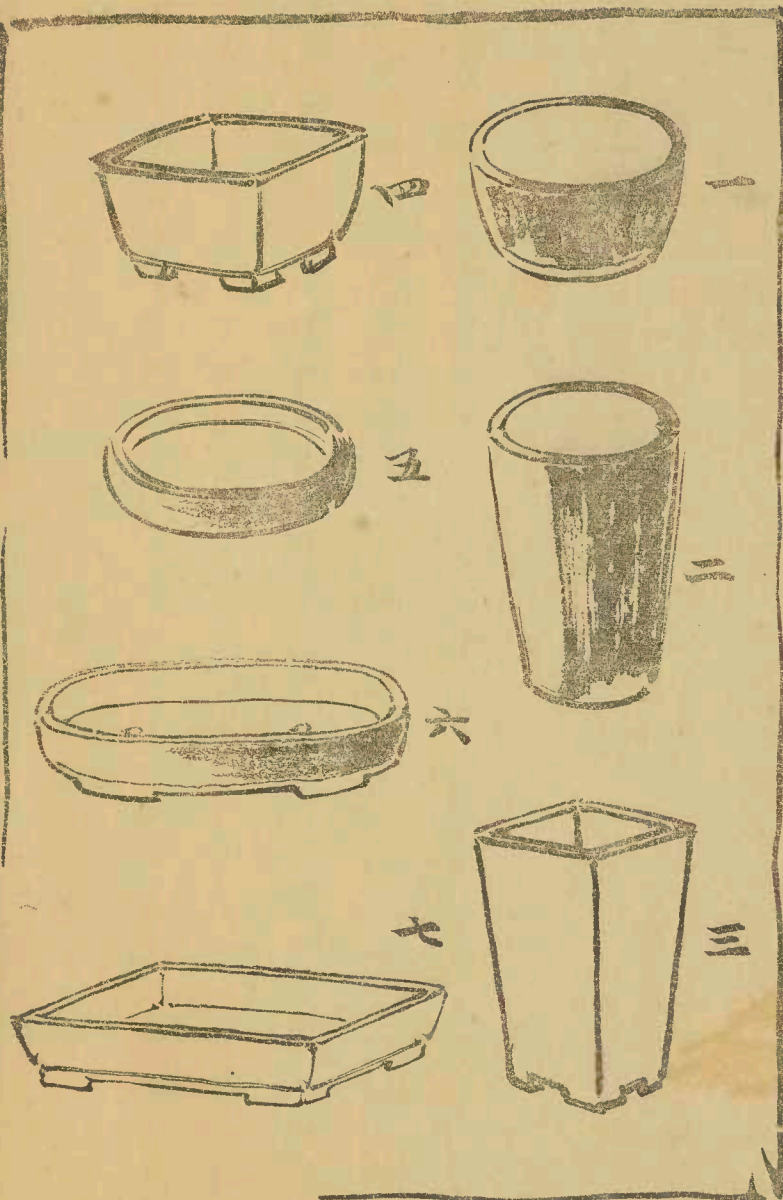
五分斗りの處にて切去り第三(卽ち左方)の如き形にする、斯くして盆裡に收むれは、夫より更に新根を生じ再び盆中一杯に擴かるのてある、此植替の際に當り、若し害虫の爲に根の損傷されたるとを認めたならば、暫く地へ假植して、其瘡痍の癒ゆるを待つか可い

植替は夏の土用中と、寒中の外は何時行つても可いか、先づ一番適當なるは春の彼岸頃で、時候が華氏の五十度前後に定つた時てある、併し此期節には往々寒温に急劇の變化を來たすことがあるから、寒氣に觸れしめざる樣注意せねばならぬ、又間々降霜を見るとあり、其際は先づ水を灌きて霜を溶かし、然る後除々に日光を受けしむる樣にすれば、急劇の變化を避けて、其害を免かるゝとか出來る、又植替後は盆中に土の落附く迄暫くの間雨に逢はしむることを避けねばならぬ、以上は總ての盆栽に適用して差支へ無いけれ

ども、獨り樅のみは暑を厭ひ寒を喜ぶものなるを以て、十一月より二月一杯迄を、植替の好時期とする、次に水拔穴の事である、水拔穴は讀んで字の如く漏水に便するの外、外氣を吸取せしむる爲に設けたものであるから、之を塞くには銅網に限ると云ふものあれども、貝殼、屋根板、炮烙、瓦鉢の缺片か却て宜しい、其證據には銅網を用ひたる時は根は決して水拔穴の處まで伸びぬか、貝殼ならば確と之を抱く迄に伸びて居る、之に依て見ると銅氣の樹木に有害なるは益明かであるから、銅網は害あるも益なしと云ふ可しだ、又屋根板ならば其腐朽する時分に、新根は充分蔓延して自然の網を作くり、土留め、漏水、外氣の吸取に、毫も差支のない樣に成つて居て頗る妙である、又或ものは松を植ゆるに、爐出をしたる鐊の切端を穴塞に用ゆるか、是れは肥料たるの効かある

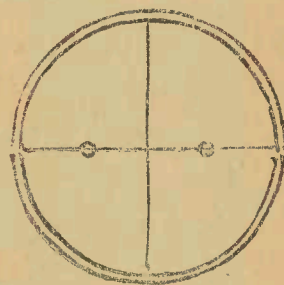
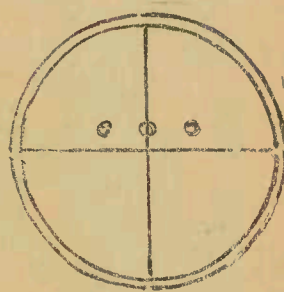
あらの事て、獨り穴塞きの爲のみならす、松の根腐れしたる場合にも鯣を以て其根を巻けは大に効能かある、又序なから蛤、蛤蜊の類を空蒸にし、一合を一升にして松に與ふる時は、忽ち脂を吹き出し、メキ〳〵肥へ太るものてある、次に說くべき事は

大体の植方てある、先づ樹容を察して其正背兩面を吟味し、正面へ聊か俯し目に植ゆれは殆んと眞直に見へ、卓上に於ける眺めは最も佳い、又土は水受けの度合を察して、盆の椽より稍や低く目に盛らねはならぬ、其椽と殆んど摺れ〳〵なる時は、灌水の際土を洗ひ流すの恐れかある、又根張に趣を添へんか爲に、其處丈け殊に土を高く盛り上け、若くは苔を附けるなどは却て見惡くきものてあるから、決して爲可きことて無い、地面は大抵平ひらてよからう

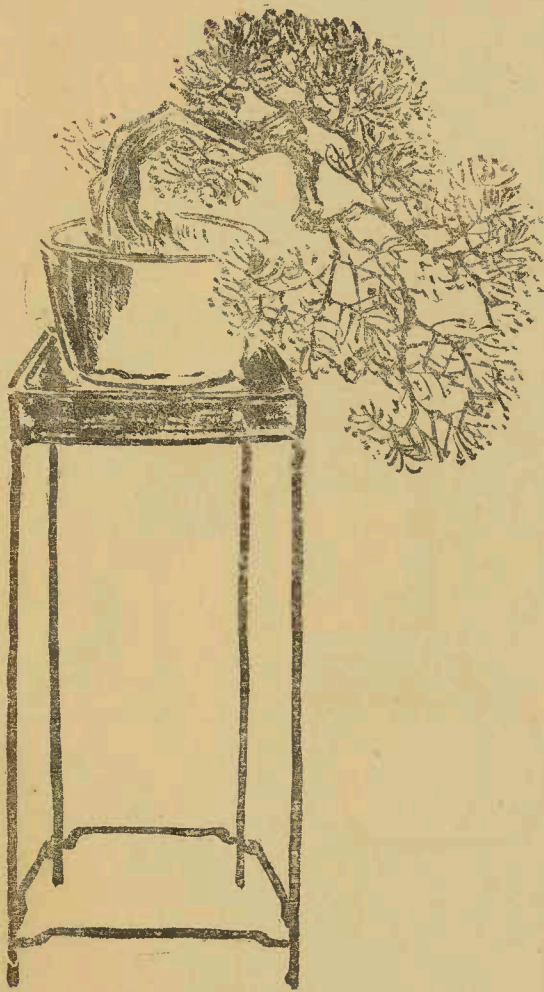
一
二
三
四
五
六
七

植方の心得は大畧右の如くであるか、盆には方圓深淺の區別ありて、樹木の姿勢に依り大に適否を異にするものであるから、盆形と樹木の關係に就て述ぶることも亦甚だ必要である、盆の形狀には千差萬別あり、從て名稱も種々あれども、歸する所は右に圖示する七種に過ぎないのである

卽ち相違は是れ丈けなれども、眞に調和を得せしめんには、先づ樹木の姿勢大小を審にしたる後に非らざれば、其適否を斷言すると は出來ぬ、併し概して云へば

(一)の如く椀形を爲して稍や深ものは、全くの平地と見做す譯には行かぬ、稍や小高き丘阜と見て可からう、であるから是には懸崖、半懸崖又は直幹物を植ゆるか可い、そして其植附の位置は、直幹物は

前掲平面圖中第一(卽ち上部)の如く、中央線より稍や背面に偏したる位置に植へ、又枝の左へ伸ひたるものは左圖の如く右に偏して

植へ、右へ伸ひたるものは左に偏して植ゆること先づ下圖の通りて可い、开處て三箇の○點を附して大凡の位置を示めしたのてある

又懸崖半懸崖ならは前掲平面圖第二(卽ち下部)に示す如く中央線

の部位を、左右何れかに偏して植へ、そして高卓の上に置て眺むるのであるか、其体裁は先づ下圖の通りてある

夫から直幹物て少〻く枝の張り過きたるものを、此種の比較的小さ

き盆を撰んて植ゆるときは、實体よりは小さく見らるゝものてある、此場合には枝振と根張りの都合に依て、左右前後何れへ偏して植ゆるも差支は無い、左圖は其有様を示したのてある

(二)及び(三)は其形より云へば寧ろ鉢と稱するのが適當である、是れは高地に見立てゝ懸崖物を植ゆるか可い、台は並卓か中卓が可からう、そして植附けの位置は總て(一)と同してあるから、枝の左に向

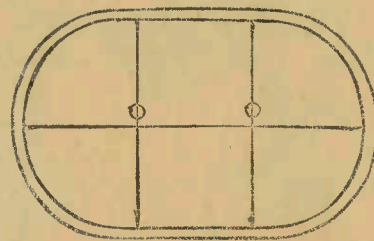
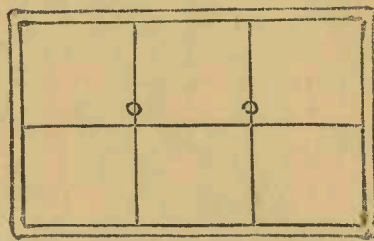
つて伸びたるものは、右に偏して植ゆるは、先づ圖の如き手加減て行れば可い

(四)は(一)と唯だ方圓の差ある斗りだが、是には懸崖又は半懸崖が最も適當する

(五)は無論平地に見立てねばならぬから、直幹、双樹、株立の類を植へるが可い、其位置は總て(一)の場合と同じてあるが、株立の場合には強ち之に準ずる譯には行かぬ、之を植ゆれは、先づ左の如き形となる

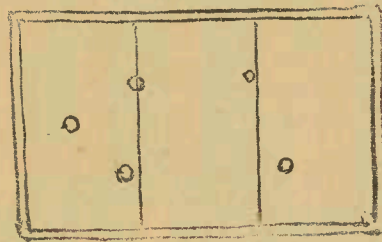
是れは苔香園所藏、椀樹と

稱するもの丶寫生なり

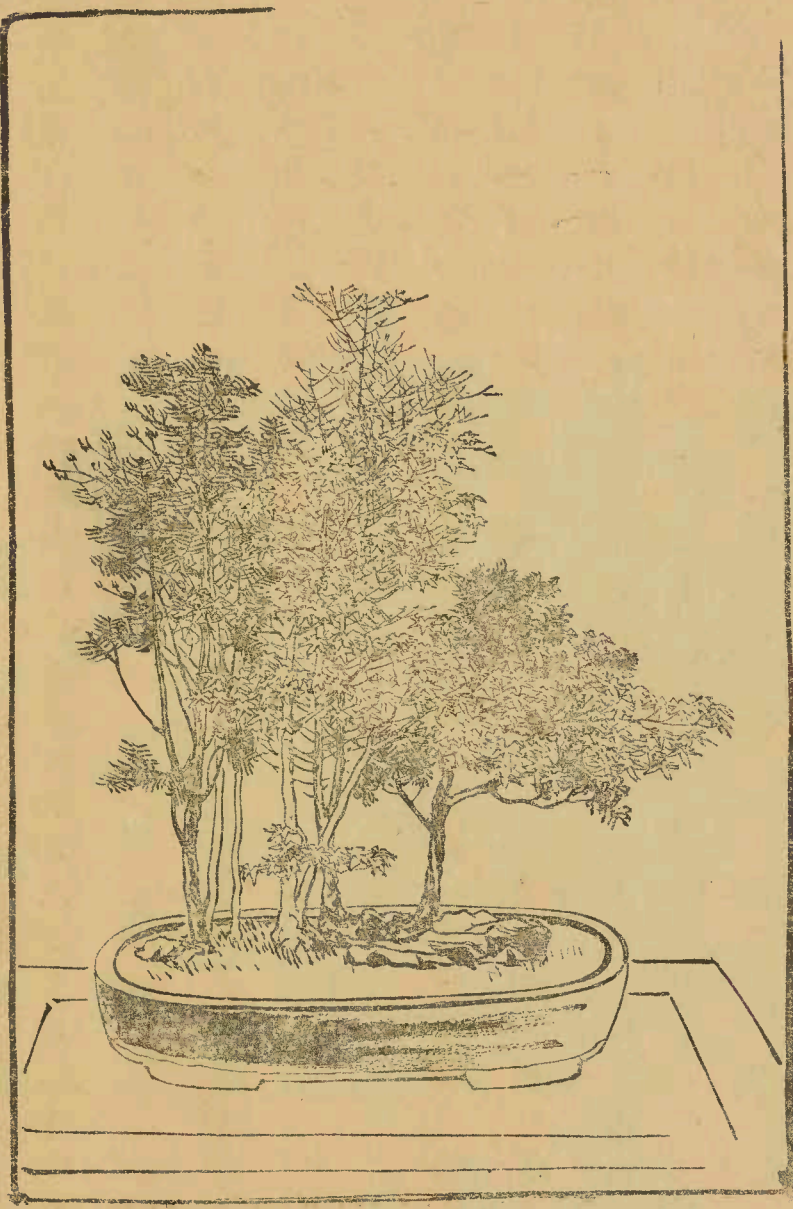
(六)と(七)は一方は楕圓て、一方は長方形なれども、同一のものと見て宜しい、是れは何れも淺い鉢であるから、平地に見立てゝ總て(五)と同種類のものを植ゆるが可い、併し其位置は

上圖の如く三分に區劃したる界線へ、聊か背面に偏して植ゆるを適當とする、そして其左右何れを撰むかは一に(一)の場合に準じて可い、特に双樹の丈け稍や高きものなどは此種の盆に限る樣てあ

る、左圖は或實物を模して其形を示したのてある

又左に示す、或る數寄者が秘藏せる松の如き半懸崖物を植ゆるも頗る妙である

又森林を摸して寄植にするにも適する、假令は五本寄ならは

圖の如く、樹の高低枝の粗密を察して適宜に塩梅するのであるが唯だ正面から見て成るべく幹の重り合はざる樣に、又高きは前に低きは後に配置するが可い序に或ものは寄植は同種類にして而かも同じ古るさのものに限ると云へども、是れは一個の癖說である、實際森林には種々の樹木を見るが如く寄植にも種々の樹木を

用ゆるが可い、假令へは或ものは長に翠色を改めず、或ものは秋に至て紅葉し又或ものは冬に逢ふて枯樹の形を見はす如く種〻の變化を呈するのが却て妙である、併し餘り樹質の異なるものを一盆の裡に収むる時は培養に困難なれば、夫等は宜しく吟味せねばならぬ

無待曰く、近頃米翁が伊藤、神田兩氏の爲に造くりたるものゝ加きは異種類寄植の上乘にして、有名なる喜谷氏の槭樹五本寄、岩崎男の白檀三本寄に比ふるも、敢て遜色なく、或は觀る人に依ては却て優れりとなすやも知れぬ、僕も實は其一人であるが、玆處には欅、榧、槭樹などを寄植にしたる或る實物の模寫を示して讀者の參考とする

以上は唯だ其一斑を示して、據るへき所を知しめたるに過きぬ、此上の工夫は實景、實物或は繪畫に依て、各自意匠を凝すより外は無い、次に

色との釣合だが、色に濃淡の差別あれども之を五色に分ては

赤 ｛朱泥、　洋紅、　紅南京
　　 梨皮泥

の類には松、柏の如き常磐木、石榴の内にても樺一重、水晶味又梅なら は白梅と云ふが如く、葉や花の色と、盆色と重複せざる樣にする、

此道理より推せは

白 ｛白交趾、　白泥
　　 白南京

等には松、石榴、紅梅、槭、樹杜松、欅の類を用ゆる

黄 ｛黄交趾
　 ｛黄南京

には柏若くは草物又此色は特に水盤に適す

黒 ｛紫泥、烏泥、黒泥、黒南京
　 ｛黒茶葉

は葉花の色と差合がないから松、柏、檜、杉、杜松、石榴、柳、櫻、欅其他大抵のものは適當する

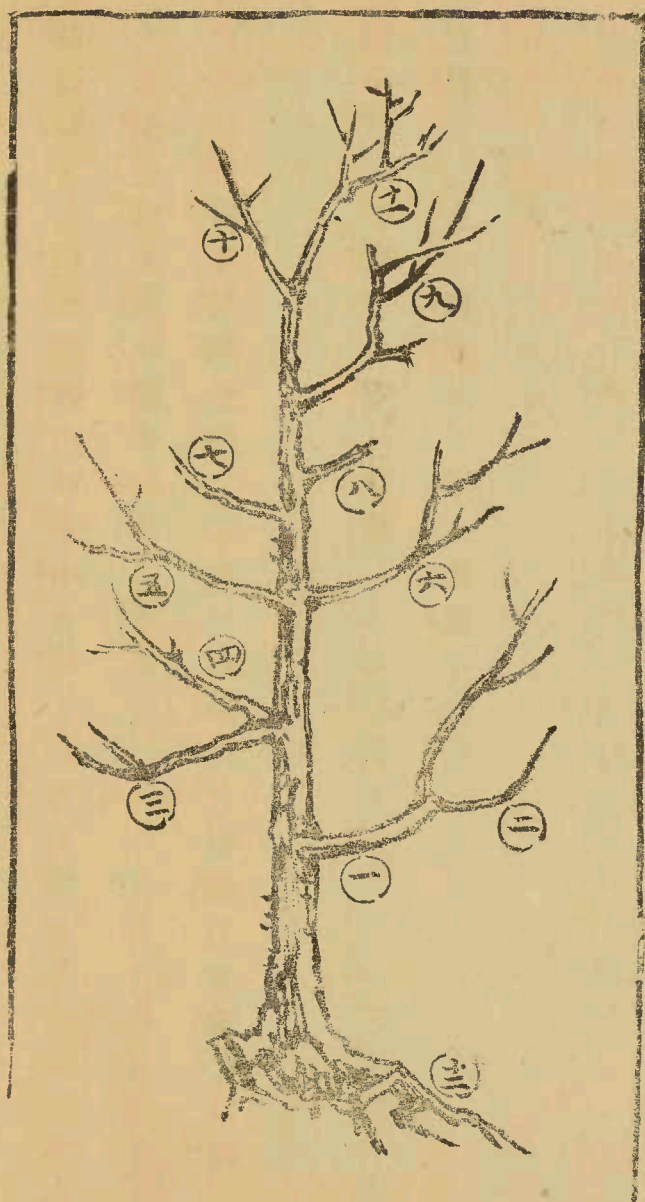
青 ｛青交趾
　 ｛均窯

は黄と同じく派手やかであるから、多く草物を植へ、又水盤向きに用ゆれども、欅や紅葉ものを出陳する場合に際し、此色の盆を用ゆれは他に差合なく、却て喝采を博することがある、此他の間色は五

色の中似寄つた何れかに組入れて可からう

○枝葉の手入

樹容を作らんが爲に種〻の手術を施すことあれども、一枝を矯め、一條を截るにも、充分熟慮し、然る後手を下すに非らざれば、往〻回復すべからざる失敗を招くことがある故に經驗なきものゝ、妄に手を入るゝことは大に愼まねはならぬが、玆には何人にても爲すことを得、且つ爲さゞる可らざる事項に就て聊か述ぶる、其前に左圖を熟覽し、且つ其圖解を讀んで置か必要てある

十一
十
九
七
八
六
五
四
三
二
一
十二

圖解

(一)は下枝　(二)袋枝若くは懷枝

(三)(四)は幹より直に二本の枝を生じたるもの

(五)(六)は對生卽ち向ひ枝と稱するもの

(五)の(七)に於ける又は(六)の(八)に於ける、倶に之を稱して重なり枝と云ふ

(九)搦み枝とて、細枝の互に交錯しさるを云ふ

(十)は枝　(十一)は眞　(十二)根張

此外圖に示さゞれども

○前面に向つて生じたる枝を差枝と云ひ

○後面に向つて生じたる枝を後枝と云ふ

茲に前面後面と云ふのは眞の向き方て區別したのである、卽ち眞

の向きたる方を以て正面とするのは普通の法則である、然るに唯ゞ偏に樹容を示さんか爲に、眞の向きに反する方を以て正面とするは往々見受る所てあるが、是れは恰も顏貌の美醜は措て問はず唯だ其後姿に見惚るゝと一般の話で、實に馬鹿〳〵しき次第と云はねばならぬ、夫から

○頭　と云ふのは樹頭の事

○足元　と云ふのは生へ際の事で、是等は別に說明を要せざれども何人も能く使ふ語で

○ジン　と云ふのがある、是れは樹頭若くは其他に於ける一部の枯枝を云ふので、其處丈け樹皮を削り取り蠟を塗つて、故に拵へるのであるが、多くは杉の如き眞直に伸るもの丶樹頭を枯らす所より、終に眞を訛つてジンと唱へ來たものてある、序に又梅の古木な

どの片皮剝ぎ取つたる樣なものを稱して

〇サバミ　と云ふが、是れば寂び味の誤りである、故に今少しく廣き意味に使ふのが穩當である、モ一つ

〇カセル　と云ふことがある、此語も其由來は詳ならざれども、其意味より察すれば或は枯れ瘦せるの略語かも知れぬ、イヤ其略語として解すれば間違は無い、談緒は圖らず岐路に入つたが、本項の主とする枝葉手入の事に立歸つて述べよう

(一)下枝　松の如きは別とし、下枝は大抵全身三分の一位の處より發生し居るのが最も見榮へがする、夫れの無いのは完全の盆栽と云ふことは出來ぬ、縱し又有つても其細く短くして、且つ枝に力のなきものは甚だ淋みしくして、大に全体の樹容を損するものである、故に下枝は大事に保存し、若し少しでも衰へたりと察せは、他の

勢よき枝を切り除くか、又は眞先より生ずる芽を摘み取りて之を窘め、其勢力を分たしむる様にするか可い、左すれは必らす回復するものである、若し又之に反して下枝のみ勢力強く、夫か爲め眞若くは他の枝に故障あることを發見したらは、下枝を窘めて其勢力を分つ様にする

(二)の袋枝は(一)の下枝を母枝として生したる子枝を示したのであるが、若し母枝の勢力不充分なりと思はゝ之を切り除くが可い、左も無いと兩枝俱に枯死するの恐れがある、併し樹頭に於ける袋枝は寧ろ多きを可とするから、樹容を察して取捨するのである

(三)(四)は殆んど同一の處より二枝の生じたるものなるが、是れも袋枝と同じく兩者何れか其一を除かねはならぬ時は、先づ全体の姿勢を察して取捨を決すべきは勿論なれども、多くの場合に於ては、

他の枝の生長を妨げざる爲に、勢力の强きを切棄てゝ弱きを殘す樣にする、併し花物は全く其反對で、弱きを去り、强きを殘さゞれは充分の着花を見ることは出來ぬ

(五)(六)の向ひ枝は之を重ぬれは其狀恰も魚骨に類し、甚だ趣を害ふものであるから、長短粗密の度を見斗ひ、適宜に除くが可い假令へは俗に云ふ三階松の如く、交互に切離すのである

左圖は或る實物を摸寫したる三階松なり

(五)(七)又は(六)(八)の如き重なり枝も亦樹容に妨けあるものは、先づ向ひ枝と同じ手加減にて切去るが可い

(九)搦み枝は春期植替を爲す前、未だ發芽せざる時に鋏み取れは、直

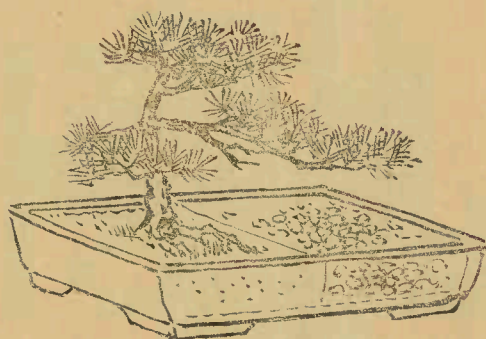
に肉を巻き其瘡痕容易に癒ゆべしと雖も、若し秋季落葉の後之を見出すや目障りなりとて切去るときは決して肉を卷くことなく、瘡痕永く癒へずして甚だ見惡きものであるから、宜く愼むべきである、併し樅のみは摘み枝を始め總て枝を切り除くには、植替と同じく十一月より二月一杯迄を以て適當の時期とする

(十一)眞は樹頭の極る處、之なきものは人體にして頭顱を備へざるに同じく、完全の盆栽と云ふことが出來ぬ、然れども强て之を全からしめんとせは勢ひ或は樹身を長大に失せしむるの恐れがある斯る場合には樹頭に生ずる新芽を摘み取り、成るべく其生長を妨ぐるか、或は樹眞を稍や斜に曲げて其身長を減ずるか、若くは又斷然之を切り除き(十)の枝を針金にて起し、眞に代ゆるのである斯くすれは樹態を完全に保つことが出來る

（十二）根張　已に全樹として觀るのでは無く枝の一部分として眺むべき懸崖物迄も根張を必要とし、樹木の肥へたる土に生ずるものは多く根を藏し、瘦せ地に生ずるものは雨露に洗はれて止むなく根を露はすのが、實景なることを察せずして、一概に根張の有無大小を論ずるは、餘り感服すべき次第でないが、根張りは一体に樹木を老大に見せしむる者であるから、樹身相當に太り且つ張つて居るが可い、夫れで若し其不充分なる場合には、上根を土より露はして、日光の直射を受けしむれば、存外速に成長するものであるが、其結果或は根の附き方が、上過ぎる場合がある、斯るものは誠に見惡きものであるから、根先を詰めて漸次に埋め込むが可い、若し夫が出來ずば斷然切去らねばならぬ

樹身相當の釣合を保たしむべきは獨り根張のみでは無い、幹も元

は太くて末は細く、枝も一枝より二枝、二枝よりは三枝と順次に細くなくてはならぬ、ソコで若し根元が細過ぎると思はゞ、松、柏杉、杜松の如き瘡痕の癒へ易きものならは、其太らさんと欲する部分を前後左右四ケ所より切込み、藁を巻きて凡そ一年間も放置せは著しく肥へ太る、其外のものは根元丈けを殘して、他を一切藁にて緊縛し、其肥大を妨ぐること凡そ一年に亘れは細き根元のみ獨り肥へ太りて、終に程能き釣合を保つ様になる、又枝の或者のみ著く發達し細大の比例を失するの恐あるときは、速に鉢より拔き取つて根を撿むるが可い、果して根の何れかゞ著く發達し居ることが分る、ソコで其根を切り取り勢力を他に分つ様にすれは、枝に於ける變狀も從つて消滅するものである、是と同じ理由で、左圖に示す如き姿勢の樹木にして、一方の長き枝のみ益々生長せんとする傾あ

るときは、其枝と同じ方向に向つて伸長せる根を切縮めて、其余分の所へは土の代りに消炭を詰め置けは之を防ぐことが出來る、要するに枝と根は其發達に就て頗る密接の關係を有し、新芽即ち枝となるべきものが、一分伸びれは新根も亦一分伸びるのが、先づ普

通の法則としてある、ソコで長く盆裡に置くときは根は盆中一杯に蔓延し、最早や一分も伸ぶべき餘地が無くなるから、其根を切り縮めて植替を爲し、發達の餘地を與へる、左様すると根と倶に枝も發達し、葉も茂れば花も能く咲くのである、茲に至て植替の必要は益明かになるであらう

○差枝　の餘り多きに失するときは、却て樹容を損するものであるから、幹や枝の一部を處々隱顯して見得る位を適度とし、取捨斟酌せねばならぬ、之を稱して胸を透かすと云ふ

○後枝　の無きは頗る沒趣味であるから妄に切除かず樹容を察して其程能きものを存し大切に保護せねばならぬ、又左右に向つて發生する枝も、或は前に、或は後に伸び、又或は長く、或は短からざれは、其狀扁平にして魚骨の觀を爲し、見るに堪へざるものである

から直きは矯め、長きは切る樣にするが可い

以上概說したる所の手段を盡すも、尙背面若くは側面より眺むるに非らざれは、樹容に趣味なきものは、針金を掛けて眞の向きを撓め直すか、或は元枝を眞に代ゆるが可い、若し夫にても飽き足らすは幹を捻ぢ直して樹容を全然變へるより外は無い

次は新芽の摘み加減だが、此手加減一つで新枝を生ぜしむることも出來れは、又贅枝を省くことも出來る、であるから

○松の如きは伸ばすべきみどり丈けを殘し其他は手にて摘み取るが可い、又

○榧、樅、杉、杜松、落葉松、柏の類は鋏を用ふれば燒け込むと稱して、稍や枯れ氣味を呈し、大に葉色を害ふものなれば、ピンセットを用ふるか、左なくは爪にて眞を摘み込むが可い、勿論大枝を切るに鋏を

用ゆることは妨げ無いのである

此他のものは春期新芽の稍や伸びたる頃、一葉或は二葉を殘して摘み去るのである斯くすれば夫より更に新芽を生じ小枝は益々繁茂する、又

葉の黑色を呈するは肥料過多の兆候にして葉と葉の間隔長きに失するは灌水過多の結果であるから、俱に控目にせねばならぬ、夫れから不用の芽を欠く塲合には、其取捨は一に枝に於けると同じで可い、假令へは或新芽を是非生長せしめて、一條の枝たらしめんと欲する時は、勢力の强きを存せねばならぬが、普通の塲合には之に反して、强きを去り、弱きを殘す樣にする、左すれば枝の著く伸びるか如き憂は無い、又或瘦せ枝を太らせんとするには他の勢力强き枝の新芽を成るべく摘み去りて、其勢力を之に分つ樣にする、花

物も亦枝と同じく弱きを除き強きを存せされは充分の着花を望むことが出來ぬ、そして結實を望む時は花を精選つて餘計のものは取去るが可い、併し樹を長く結實の儘に置くときは、大に其勢力を妨げ、物に依ては夫が爲に枯死すること間々あれども、蔕の處より一寸位の間、枝の皮を剝ぎ去りて樹の勢力の通はさる樣にすれは結實を永く保たしむるも差支へは無い

○苔の事

地面に苔の附きたるは頗る古雅にして、盆栽に一段の趣を添ゆるものなれども、苔は日光を遮りて水乾きを惡くし、又夫あるが爲に乾濕の度を計る能はず、或は灌水の際一瀉全盆を濕すと云ふ譯には行かず、兎角に水の加減六ケ敷ければ、成るべく之を用ひぬが可い、唯だ苔は陳列の際に限りて用ゆれは足りるのであるが、若し强

て平素より附け置んと欲せは、苔を日光に曝らして細砂の如くにし、更に篩に掛けたるものを蒔附け、風の爲に飛散せさる樣其の上へ少許の土を振懸けて水を灌けは、梅雨の期節ならは三週間位にて見事に發生するものである、併し其多に過ぐる時は却て趣を害ふのみならす、上述の如き弊害があるから大に加減せねはならぬ又化裝砂の如きも、夏期に至れは炎熱反射の恐あるから用ひぬが可い、是れも又陳列の際丈けで可い

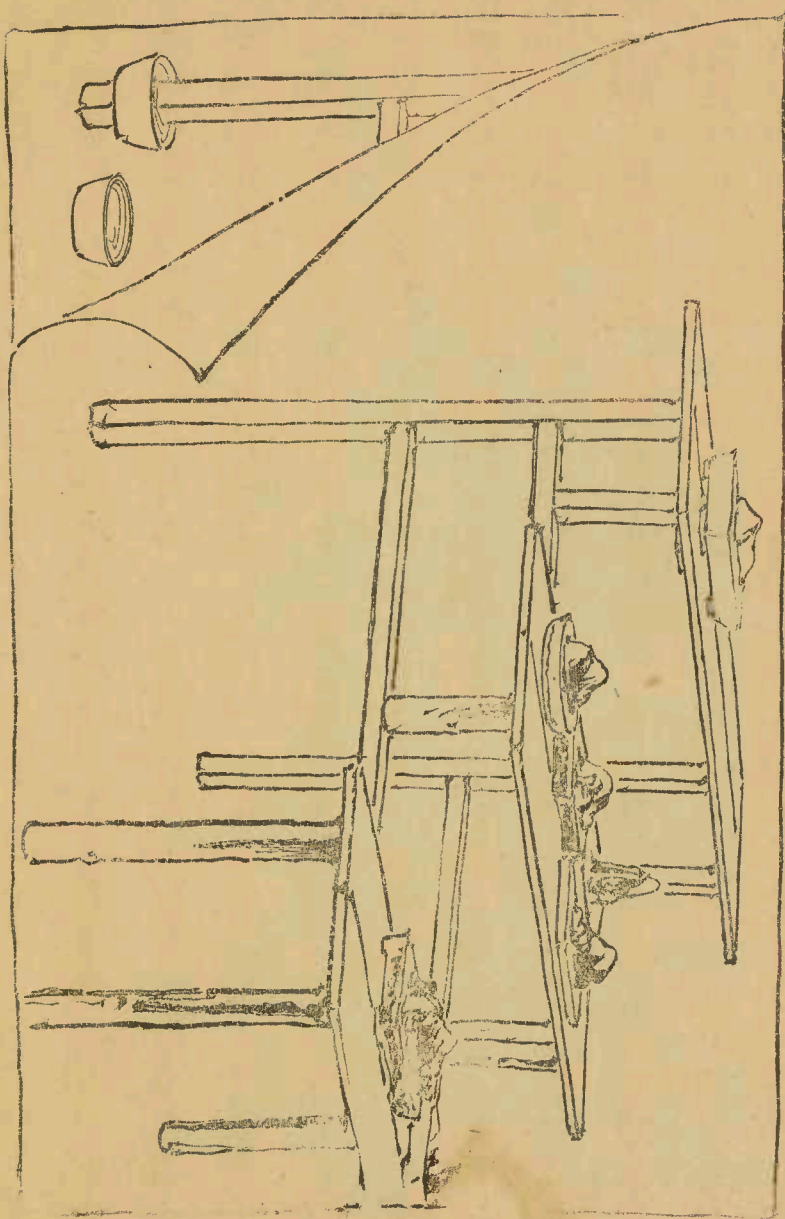
○根締石の事

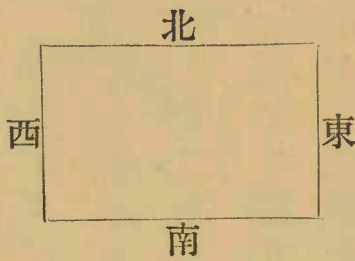
又苔の外に盆栽の風致を增す者は根締石である、之を使用するは多く樹容不完全にして、盆中何となく餘地を存する場合であるけれども森林に摸したる寄植の中に崩屋形の石を配置し、若くは或實景を寫す爲に小石を用ひたなどは、大に雅趣がある、そして之を

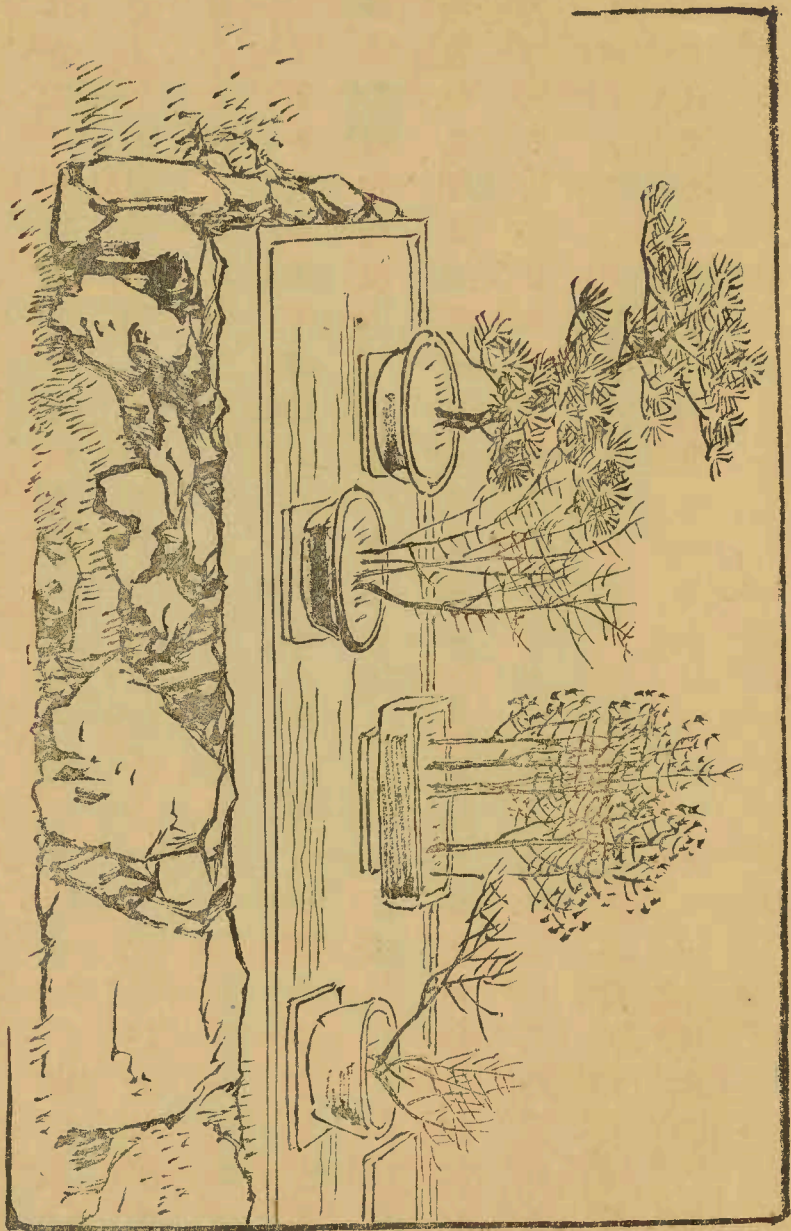
用ゆるは大抵平地に見立てたる場合であるから、峯巒山嶽の形を為したるを避け、岩石の状を具へたるを使ふ様にするが可い、併し樹容完全にして、盆との鈞合宜しきを得たる時は之を用ゆるの必要もなく、亦其余地をも存せさるものである、故に數寄者の多くは餘り根締石に重を置て居ぬ

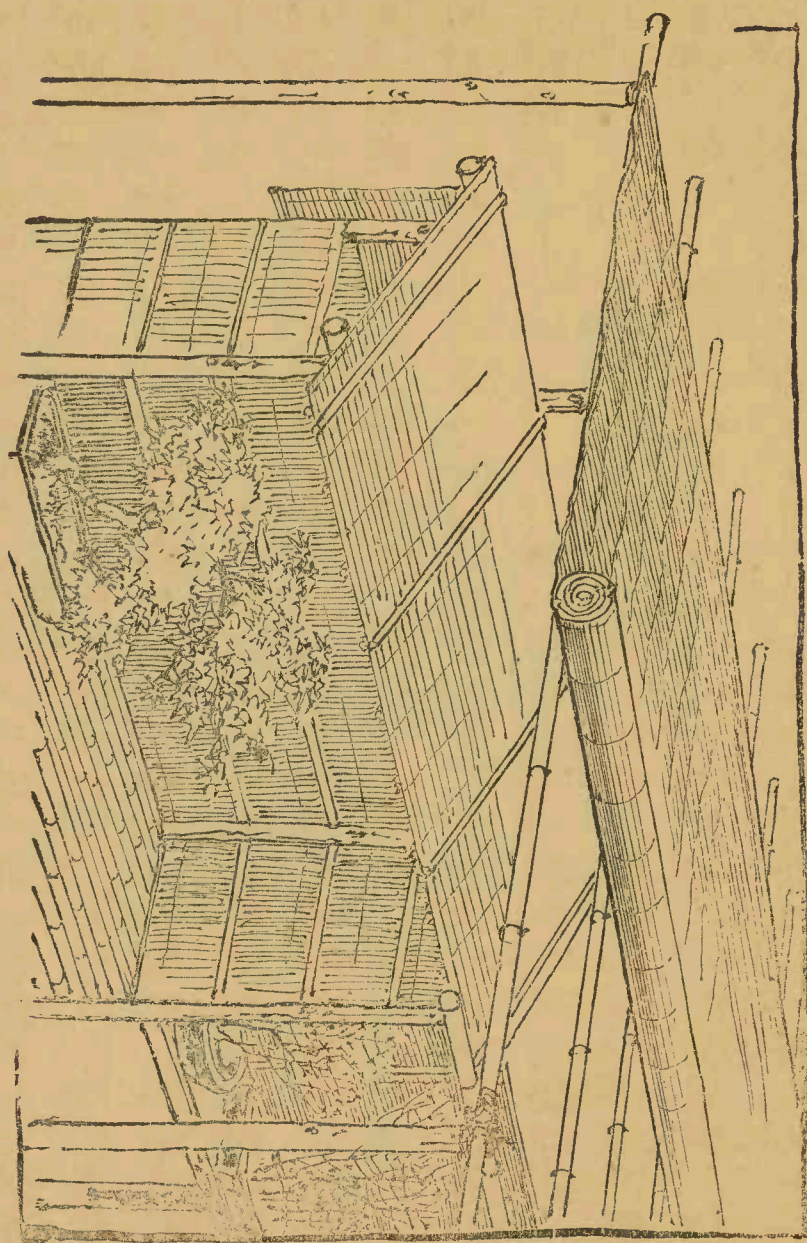
○盆栽保存の事

施肥、灌水其他の手當充分に行届くも、保存の方法を誤るときは、多年の丹精も一朝にして水泡に歸することがある、全体盆栽は室内に於て觀賞すべきものなれども、四時を通じて室内に置くは決して保存の途では無い、矢張り自然生の物と同じく、太陽の光熱を受け、外氣に觸接せしめて、春來れば芽を生じ、花を着けさせ、夏に至りて枝茂り、秋に逢ふて實を結び、葉落ちる様にせねはならぬ、是れ季

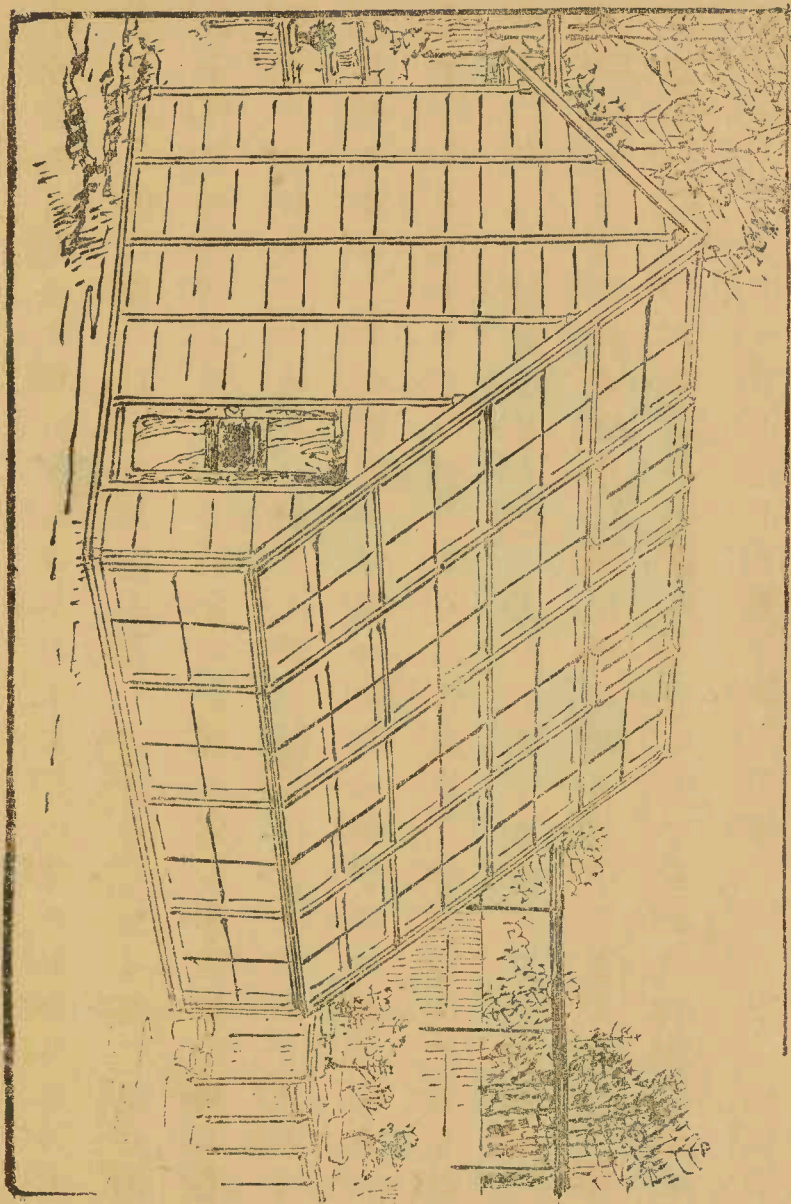
候の循環、四季の變遷に伴ふ所以で、此自然の大原則に逆ふことは出來ぬ、或は溫室內に容れて不時に花を咲す如き工夫もあれど、夫れ唯だ花を眺むると云ふに過ぎぬ、盆栽は三冬の嚴寒を防ぐの外は室內に入るゝに及はぬ、成るべく自然の氣候に曝すのが保存の良法である、併し實体の百分、千分の一にも縮小され、尺寸の土壤に依て僅に生活するものであるから、酷暑嚴寒を避くべきは勿論妄に風霜雨雪に逢はしめざるの必要がある、ソコで第一に設くべきは其置き場所だが、若し日當り、風通し倶に宜しき處ならば、地上に直に置く方、寧ろ盆栽の發育に便なれども、或は蟻、蚯蚓の附くことあり、若くは泥土の爲に枝葉を汚さるゝの恐れあれば、乘せ臺を作るが可い

乘せ臺は圖の如く三段若くは二段の棚架を作くり、其低きは地上より凡そ二尺とし、夫より一尺位づゝ高めて行くのである、併し場所が廣ければ二段でも一段でも可い、段の少くして低い方が取扱に便利である、又低い丈け盆栽をして地氣を汲取せしむるに都合が可い、又成るべく日當り、風通し倶に宜しき場所を撰んで設け、木の下露などの懸らぬ注意をするが肝要である、そして蟻除けの爲には前圖の一隅に示す如く乘せ臺の脚部へ武力類にて作りたる椀形のものを緊着し、其中へ少許の水を盛り得る樣にするも可い、又狹き場所に設くるものは取外しの出來得る樣に爲し置けば、冬期不用の節には大に便利である、併し懸崖物を普通の乘せ臺に置く時は、枝先を損傷する恐があるから、矢張り高卓の上に置くと同じ格で特別に左圖の如き乘せ臺を設け其上に置くが可い、併し室

内とは異なり鉢を細き棕櫚繩にて、臺へ縛り附け置かざれば、風の爲に轉落され、盆栽を損傷するの危險がある、又盆栽を乘せ臺に置くに就ても多少心得置かねばならぬ事がある盆栽の位置は前已に述へたる通り、眞の向きたる方面を以て正面とするので、畢竟諸木大抵太陽卽ち南に向つて發生するからであるのだ、ソコで盆の方位は、左圖の如く

右方を東とし、左方を西、背面を北、正面を南とするから、松の如きを

盆の一方に偏して植ゆる場合には、必ず西に位置を占めさせ、東南に向つて樹つ様にする、併し柏は衆木と異なり獨り西を指して伸びるのが、其本性であるから、東部に位置を占めさせ、公孫樹は陰木にして多く北に向つて伸びるものなれば後枝を多くすべしと云ふ古實がある、是等は例外と見做して可い、兎に角日に向つて生長するのは普通樹木の性質である、此理より推せば或枝をのみ故に發達せしめんと欲せば、夫を太陽の方面に向けて置けは其目的を達することが出來る、又格別の注文なきものにても同じ位置に永く置くときは日に面する部分のみ獨り發達して、全体の釣合を失ふに至るから凡二ケ月毎に置き代ゆるが可い、夫から又左圖の如く

セメント若くは三州タヽキにて高さ一二尺巾三尺長さ一二間或は夫れ以上の土壇を作くり深さ二三寸位の水を湛ゆる樣にし、甃を所々に列べ、其上に盆栽を置くのもある、是れは極めて雅致あるものなれは、昔より行はれ來りしも、水を湛ゆるの一事は、予が今より凡そ十八年前に發明したのである、其發明の次第は、昔時より實物は水鏡を見せると其發育特に著るしとの云ひ傳へがある、之を研究したる結果、樹枝を水面に伸はさしむれバ、葉裏を冷やし、水氣を吸取せしむるから、大に發育に効能がある、是は獨り實物に限らすと分つたソコで此水を湛ゆることを考へ附いたのだが、此裝置は啻に樹木の發育に効あるのみならず、蟻を防くには最も妙にして、且つ灌水貯藏の器ともなり、又金魚抔を放養せば一層の眺めとなる又夏時に在て炎威を防くには左圖の如く

なる又夏時に在て炎威を防くれは左圖の如く

葦簀の蔽ひを設け、午前の內丈け充分日光を受けしめ、午後は之を伸はして日除けとする、そして夕方に至れば捲いて取除のである併し藤類の如き多く水分を含むものは西日の强き處に置くも差支へ無く、且暑中施肥するも妨けない、又夕立の際には速に葦簀を取除かざれば點滴の爲に盆栽を損傷するものである

夫から冬期は恰も盆栽の睡眠中であるから松を除の外は、施肥の必要なく、灌水も亦拾ひ遣りにし、常に濕り加減に土を保つの外、唯だ寒氣を防ぎて氷結の憂を除くの工夫をすれば足りるのである、其方法として一個の箱を作り、其中に棚段を設けて盆栽貯藏の場所とし、更に箱の三方を紙にて張るを以て良とする者あり、所謂片手持以下にして其數少き場合には、是れ亦一個の良方法であらうけれども稍や大なるものを雜へ、數亦多き時は、一切之を箱中に藏

することと出來されば、矢張溫室を作くるが可い、溫室とても別に蒸氣の力を借る如き大層なる仕掛に及はぬ、イナ及はぬのみならず蒸氣を用ひては却て害になるから、唯だ寒氣を防ぐと云ふ丈の主意を以て、頗る簡略なるものを作くれは足りる、假令へは邸内の日當り好き場所を撰みて二坪、或は夫れ以上の小屋を設け、屋根の一半及び南面若くは東面(卽ち場所に依りては南面して設くる能はされはなり)の入口を硝子障子とし、充分太陽の光熱を受けしむるの仕掛けで可い(別圖參觀)併し終日密閉するは宜しからず、時々開放して空氣を流通せしめねはならぬ、又寒氣連日に亘るも決して火氣を用ゆるに及はぬ、表面に薄氷を見る位が却て盆栽の爲には良い

○石附の事

之を造るには、鑽にて其植へ附けんとする石へ深さ五分斗りの穴を數ケ所に明け、銅の針金を差込み、之を定着せしむる爲に更に鉛の針を打込み、其石より出たる針金の二端を以て木の根を縛り石に緊着せしむるのである、そして上部の根丈は少許の土と水苔にて包み、石の儘鉢の中に置ときは、根は漸次に伸て終に石に搦み附き充分に之を包擁するに至る、其時試に樹幹を持ち擧れは、石も倶に擧りて決して離るゝ者で無い、之を造くるは彼岸より入梅中迄を好時期とする、そして平素は砂を盛りたる盆中に置く方、木の爲には宜しく且つ其儘にても觀賞し得らるれども、更に水盤に入れて根、洸ひとすれは一層雅趣あるから、陳列の際には凡そ一週間前に鉢中より取出すが可い、陳列し終れは再ひ盆中に入るゝことを

忘れてはならぬ

○針金を掛くること並に捻り方

天然の美に意匠を凝らしたる人工を加へて眞個の活畫たらしむる爲に針金を用ひて曲れるは伸はし直きは矯めて樹容を變ずるのであるが、其方法は

幹の曲れるを直くせんと欲せは、幹に竹或は鐵棒を添へ少しく地に差込み、棕櫚繩を以て順次に巻き擧げ、凡そ一年間も其儘に放置せは大抵目的を達することが出來る

又枝の大なるものにも此方法を用ゆれども、其小なるもの、若くは樅樹の如き軟質のものは、針金の力のみにて、充分矯め直すことが出來る、併し直接に針金を用ゆれは樹身を傷くるの恐れあれは、其銅たり、鐵たるを問はず、成るべく紙を巻きて用ゆるが安全である

そして針金は曲げる方へ向けて巻き行くのであるが、若し此際誤て枝を傷くることあらは、水苔を其部面に當て藁にて巻き置けば之を癒すことを得、又枝を切去たる時も、其瘡口を聊か凹目に削て同じ手當を施すが可い、針金を懸るは春の彼岸頃に始め五月下旬頃迄に、間々へ懸け掛へ、夏の土用後に至て一旦取外さねはならぬ、然ざれは針金は深く樹身に喰ひ入て挽回すべからざる瘡痍を殘すとがある、そして若し其際尚不十分なりと思はゞ更に掛替へて可い

以上の手術を用ひて尚足らずとせば、更に幹を捻ぢ、枝を捻ぢて、全然樹容を變ずるより外は無い、殊に樹身長大に失し盆裡に收むる能はざるもの丶如きも、此法を用ひて懸崖造に仕立つれば、大に其觀を改むるものである、其方法は

幹なり、枝なりへ先づ縦に藁を巻き、次に其曲けんと欲する方面へ

向つて横に藁を巻き、思ひ通りに手にて之を捻ぢ曲げ、彈ね反へらざる樣、棕櫚繩にて引附け、更に竹の撥を施して堅く縛り附くるのである、若し其太く且つ堅き場合には、先づ木捻廻はし或は割鑿にて、樹を縦に、左右前後より、殆んど双方へ拔け通る迄に切込みて、前述の手術を施すが可い、そして凡そ一年間も其儘に放置し、之を解放する時は、再び原形に復せざる樣になつて居る、其方法は此の如く甚だ簡單なれども實際之を行ふには、大に手練を要するを以て、妄に手を下すべからすである、左圖は其手術を施したる有樣を示す

○害虫の事

施肥、灌水の外、更に大に注意すべきは害虫の驅除にして、若し之を怠れは不知不識の間に大切の樹を枯死せしむることがある、先づ害虫の種類を擧くれは蟻、蚯蚓、猫蛙、簑虫、毛虫、油虫、貝殻虫、粉虫、髓虫肌虫等であるが

蟻、蚯蚓、猫蛙の類は樹根を害するものであるから、平素外部より入込まざる樣注意すべきは勿論なれども、若し自然に發生したるもの、若くは既に外部より入込みたるものを取除くは、植替の時に於てするより外は無いが、其中蟻丈は附木に砂糖を乘せたるを樹下に置き、之に寄集せしめて取除き、又更に附木を置き變ゆること、凡そ三十分毎に一度と云ふ見當を以て、幾度となく繰返へせは、或は全く驅除することが出來る

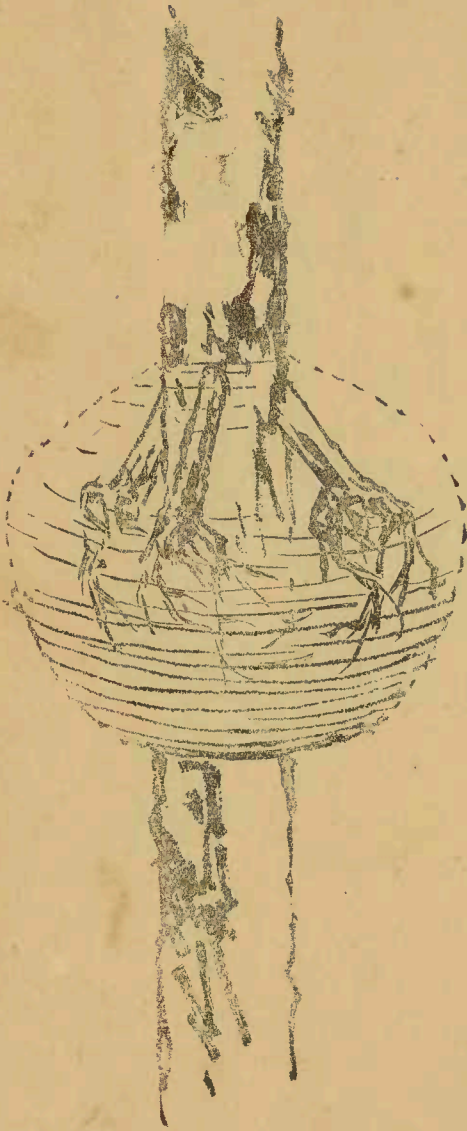
簑虫、毛虫は云ふに及はぬ、唯だ摘み取る斗りである
油虫は毛の硬き筆に冷灰を附け、之を以て盥又は石油の明罐の中へ拂ひ落すか、或は蚤取粉を熱湯に解き、十倍の薄さにしたるを如露にて注ぎ懸け、其魔酔して下に落ちたるを箒き除けるが可い
貝殻虫は色白く形貝殻に似たるより其名を得たるもので、幹や枝に附くものであるから、菜箸を以て一々取去らねばならぬ
粉虫の松に附きたる時は、豆腐を製造したる湯を冷し、夫を筆に附けて洗ひ去れは容易に除くことが出來る
髄虫ば深く樹の眞へ喰ひ込みて枯死せしむる最も恐るべき奴なれども其喰ひ込みたる跡は外部からは一寸と分らぬ、併し能く注意して樹下を撿むれは、必らず鋸屑様の虫糞を認むる、其場合には其穴へ樟悩又は鬓附を詰め置くか、或は針金を突き通して殺すよ

り外は無いのだ

肌虫も亦往々樹を枯死せしむることあれども髓虫の如く深く喰ひ込まず、唯だ外部を喰ひ廻はすものであるから、是れは針金を以て掘殺すことが出來る、此虫は重に梅、櫻に生ずるものにして、其場合には必らず脂を吹き、虫糞の附着するを認むるものである

○差木、接木取木の事

差木は樹を斜に、兩面より削づりて、樹皮の損傷せざる樣、土中に差込むのである、其時期は春の彼岸より入梅迄を好とする、又接ぎ方は種々あれども、玆には唯だ其中の一法を示す、夫れは、或る大樹の振好き枝を取木にする時の場合であるが、先づ枝の側面を横に切込み、更に斜に外面へ削つり下ろし、夫れに添ゆべき台木の先きを漆膠合ふ樣に削つりて壓着し、三個若くは四個を加へて、其上を土

と水苔にて包み、更に藁にて卷くのである、之を行ふは三月下旬より四月上旬迄にして、凡そ七十日を經たる後、接着部より以下の樹皮を剝ぎて水汲を止め、更に二十日間を經て藁を解けば、大抵は已に目的を達して居る、けれども此仕事は頗る手際を要するを以て素人には隨分困難であらう、唯だ斯の如き方法のあることを知らしめんが爲に、其概要を說き、併せて左に圖示するまでゝある

又樹の足元を切縮める場合には左圖の如く切込み其上を土及び水苔にて包むことは總て前記取木の場合と同じ様にし、三月下旬より四月上旬に之を行ひ、凡そ百日を經は、其切口より根を生じて居るから其下部より切去りて、鉢に移すのである、是れ亦大に手際を要するは勿論である

以上は盆栽の内専ら樹木に就て述へたるものなれども、此外竹類

に就ては筍皮を剝ぎて節を詰めること、及び走り根を取り除くこと等の特別なる事項あり、又草物に至ては實に千差萬別にして其原產地に應じ、大に培養法を異にするものであるから、玆に一々說示することは出來ぬ、夫等は更に他日を期し述ぶることにする

盆栽培養法終

弊園獨得の日本製盆栽鉢幷に水盤類は大に愛樹家の喝采を博したれども尚某氏の勸に依り支那の原産地と特約を結び支那製磁器をも輸入し併せて販賣致候に付き益々御愛顧あらんことを希望仕候此外夏期中は盆栽、盆景、各地の水石類を店頭及び樓上に陳列致し正札附にて販賣仕候に付き御散歩の序には兎に角御立寄御一覽の榮を賜り度候謹言

三銀水石園

明治三十六年五月廿五日印刷
明治三十六年五月卅一日發行
大正十年六月拾五日再刷

定價金貳圓

著作兼發行者　加藤銀次郎
東京市京橋區南金六町四番地

印刷者　金山佐次
東京市下谷區入谷町三百九十六番地

印刷所　博眞堂
東京市下谷區入谷町三百九十六番地

發行所　三銀水石園
東京市京橋區南金六町四番地
(電話銀座三百七十番)